論　文　審　査　の　要　旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　学　術　）	氏名	操　智
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

日中両国漢字の相違意義が生じた原因に関する研究

論文審査担当者

主　　査	教授	荒見　泰史	印
審査委員	教授	柴田　美紀	印
審査委員	教授	井上　永幸	印
審査委員	准教授	李　　郁蕙	印

〔論文審査の要旨〕

本研究は、中国語と日本語で使用される同一の漢字語の語義が時に両国間で異なることを問題点として掲げ、その差異が生じた時期と原因について文献調査により検証した中国学的研究である。

本論は、第１章から第３章までで研究背景から調査方法までを述べ、そして中心となる第４章において「安」、「悔」、「催」、「真」、「本」などの文字を取り上げ、歴史的文献の精査によってそれらに異なる意義が生じた時代、そしてその原因について検討している。そして第５章では、結論として、和語の影響による「誤解」や、中国語で消失した語義を日本語では「化石」のように残しているケースなどを総括し、そうした差異が生じる日本語の特徴や、それに対する中国語の特徴、日中の時代背景にまで論及している。漢字字義の比較研究はこれまでにも先行研究が多く見られるが、申請論文ではこうした漢字字義が相違する原因を言語の相違や、発展段階という角度から論じており、そうした点は新しい研究と言える。

結論として、日中の漢字字義に差異が生じた理由を以下の四つのパタンに分類して説明している。

①漢字と漢字に当てられる和語が本来異なる言語の異なる語義を有することによる。日本漢字に見られる特有な意義は、訳語（和訓）に利用された和語の意義に異なる概念が含まれる。例えば日本の「安」に「値段がやすい」という意義があるのは、和訓「ヤス」音の「ヤスらか」など日本語の同音異義語によるものである。

②日中両国の漢字字義がそれぞれ歴史的に変化することによる。例えば、中国の「真」はもともと「純粋にそれだけで、混じりもののない」という意義だったが、今日では、これらの意義は「純」字によってあらわされ、「真」の代わりに「純」が多く用いられるようになっている。逆に、現代の日本漢字「真」にはその意義が残っている。

③古代の日本人が微妙な概念の差の中で翻訳する際に、徐々に誤って解釈されるようになったことに起因するもの。例えば、日本の「真」の「ちょうど」という意義の由来は、恐ら

く当時の日本人が日本現存最古の字典『新撰字鏡』などの記述から徐々に誤訳が進み、「正」の意義の一つである「ちょうど」を「真」の意義の一つとして取り扱うようになったことがあげられる。

④近世以降、日本の庶民階層が漢字の意義を熟慮せず借用する傾向があったことによる。また読み方が類似する和語で混用されるケースもある。「廉い」を「安い」と書き、「濱」を「浜」に書き換えることもそれに属する用法であろう。

以上のような分析と論証を行う為に、申請論文では古代から今日に至る日中の文献資料を大量に解読を進め分析を行っている点は特筆すべきであろう。とくに、文献資料においては電子資料も多用しているが文献の版本調査を徹底して行い、第一資料によって分析を進めることに最も精力を傾けている。

審査の結果、本論文は、以下の点で評価される

（一）膨大な一次資料を調査するところから研究を始め、丹念な調査に基づく分析を行っている点。

（二）日本と中国で共有される漢字という文字の中には異なる概念が潜み、コミュニケーションの上でしばしば問題を引き起こすことが指摘されるが、言語的差異及び歴史的経緯から総合的にその差異の原因を分析した研究はこれまでに見られない点。

以上の審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考　要旨は，1,500 字以内とする。